



北海道公立高校入試【社会・公民】完全攻略プリント①
習志野受験研究所 ～15 年間（2012～2026 年）の出題データから導く「資料事実と公民知識を結合する 4
ステップ記述トレーニング」～

【本教材のガイダンスと到達目標】

対象者：北海道公立高校入試を受験する中学 3 年生（および指導者・保護者）

特に向いている生徒：

- ・ 公民の用語や制度は暗記しているのに、資料連動の記述問題になると手が止まってしまう生徒
- ・ グラフの数値をそのまま書き写してしまい、公民の知識や理由まで説明できない生徒
- ・ 「利点と課題」「理由」「工夫と効果」「立場と要求」など、設問が求める答案の骨格からズレてしまう生徒
- ・ 資料から読み取った客観的事実と、自分の知識による解釈を混同して書いてしまう生徒

このプリントでできるようになること：

- ・ **条件確定力（Step 1）**：設問要求から「答案の型（文末や対比構造）」と指定条件・使う資料を迷わず確定できるようになる。
- ・ **事実抽出・分離力（Step 2）**：資料から勝手な理由や解釈を交えず、客観的な数値・変化・形状だけを正確に取り出せるようになる。
- ・ **知識接続力（Step 3）**：抜き出した資料事実に、教科書レベルの制度目的・社会的因果関係を論理的に結びつけられるようになる。
- ・ **答案構成力（Step 4）**：Step 1 で決めた型へ、Step 2 の事実と Step 3 の知識を過不足なく流し込み、設問条件を満たした答案を作成できるようになる。

推奨する使い方：

- ・ **Step 1（基本ロジックの理解）**：第 1 章・第 2 章を読み、北海道入試における「為替と海外移転（2025 年）」および「非正規雇用（2026 年）」の実例から、なぜ「資料だけ」「知識だけ」では不十分なのか、4 ステップの仕組みを把握する。
- ・ **Step 2（ステップ分解演習）**：第 3 章 第 1 部の特訓ドリル（問 1～8）を解く。いきなり答案を書かず、問題用紙の枠に従って「Step 1 条件確認」「Step 2 事実抽出」「Step 3 知識接続」を書き出してから「Step 4 答案化」を完成させる（目安時間：30 分）。
- ・ **Step 3（系統非開示・実戦演習）**：第 3 章 第 2 部の実戦ドリル（問 9～12）を解く。系統名が伏せられた本番形式の中で、自力で設問の型を見抜き、4 ステップを回して答案を作成する（目安時間：20 分）。
- ・ **Step 4（照合と分析）**：第 4 章の解答・解説を熟読し、各問の「解法ロジック」と「採点ポイント」を確認する。
- ・ **Step 5（誤答分析）**：各問の「誤答原因チェック欄」を使い、ミスの原因が「条件見落とし」なのか「資料事実の欠落」なのか「公民知識の不足」なのかを言語化する。
- ・ **Step 6（過去問接続）**：第 6 章の「過去問演習 組み合わせ優先度表」に従い、実際の入試問題で 4 ステップを実践する。

【冒頭 1 分要約：15 年分析が導いた結論】

【結論】資料連動型記述は「作文力」で解くのではない。「条件」→「事実」→「知識」の順に答案の材料を分解して集め、最後に組み立てる技術である。

2012～2026 年度の 15 年間の出題データを分析すると、北海道公立入試の公民記述には以下の明確な出題事実が確認できる。

1. **形式の明確な時期差**：2012～2020 年度（9 年間）には資料を直接根拠とする説明記述は確認されず、純知識型の記述（三権分立、年功賃金など）が中心であったのに対し、**2021～2026 年度（6 年間）は 6 年度連続で資料連動型説明記述（計 7 問）が出題されている。**
2. **注意すべき 2 つの答案傾向**：資料連動型記述で注意したい答案は、①資料の数値を書き写しただけで公民知識がない答案（例：円高になったから）、②教科書の知識を書いただけで資料に触れていない答案（例：安い労働力を利用するため）の 2 つである。
3. **答案作成の共通処理**：出題テーマ（雇用・為替・環境・財政・都市計画）が異なっているも、今回確認した正答例では例外なく「資料から取り出した客観的事実」に「教科書の公民知識」を接着し、設問要求の型でまとめる処理で構成されている。

★ 答えをいきなり書くな。まず「条件」「事実」「知識」の 3 つのパーツを揃えよ。

第 1 章：15 年間の出題データに見る「資料連動型記述」の実態

北海道公立高校入試の公民分野において、2021 年度以降に出題された資料連動型記述（計 7 問）を精査すると、すべての問題が「資料事実」と「公民知識」の二重構造を持っていることがわかる。その代表的な 2 つの実例を確認する。

実例①：事実と知識の結合——為替相場と企業行動（2025 年 問 6(2)）

- **設問概要**：円相場の数値表（資料 5）をふまえ、日本の製造業が生産拠点を海外へ移転させた理由を、指定語句「労働力」を用いて説明する問題。
- **資料から確認できる事実**：1983 年の 1 ドル 237 円台から 1989 年の 137 円台へと、急速にドルの価格が下落した（急激な円高の進行）。
- **接続すべき公民知識**：円高下では海外での生産・人件費負担が割安になり、現地の安価な「労働力」を活用しやすくなる。
- **答案の構造**：
 - × 資料事実のみ：「1 ドル 230 円台から 130 円台へと急速に円高が進んだため。」（なぜ海外移転するのかという理由が不明）
 - × 公民知識のみ：「海外にある安価な労働力を確保して製品を作るため。」（資料の数値をふまえていない）
 - ◎ **条件を満たす答案例**：「急速に円高が進み、海外の安価な労働力を確保・活用できるようになったため。」